



生き物・命

命との向き合い方

今年度に限らず、ダンゴムシやカブトムシ。バッタに蝶など、子どもたちにとって身近な生き物。ですが、今年度は特に興味を持ち、継続的に触れたり観察したりする姿が多く見られてきました。

暑さのピークも超え、少しずつ夏に盛り上がっていた生き物たちの命が燃え尽きているこの頃…。子どもたちは初めて経験する「命との別れ」を迎えています。

先日、年長児の担任と生き物についての話をした時担任の保育者から「お墓を作ったらおしまいになりがちで…それがダメじゃないんだけど…悩むんですよね」という趣旨の相談というか、雑談をしていました。確かに子どもたちがそれまで大切にしてきた命。子どもたちが納得のいく形でお別れをしてほしい。そんな気持ちもある中で「お墓づくり」というテンプレート的な活動になってしまうのは子どもの声を大切にすることがゆえになりがちだよな…と、僕自身も考えていました。

私たち保育者はその何に違和感を感じているのだろう。と、しばらく雑談をしながら話していると、お互いに思う部分が一致しました。それは「埋めてしまったら子どもたちの気持ちが薄れていく」という部分でした。それまで一生懸命に生き物に触れ、お世話をし、大切に生きてきても…命尽きて土に埋めてしまうと、なかったことのように子ども達の想いが風化していってしまう。それがどうしてもなくもったいないように感じる。と、いうことが2人の中で腑落ちしました。その時は「どうしたらいいだろうね」というところで話は終了していたのですが、先日「この素材もらってもいいですか？」と保育者から相談が。もちろん「いいよ～」と伝えました。子ども達のサークルタイムの中で話をし、「お墓を作る」ということになったようです。ですが、今回のお墓は普段のものと少し違っていました。メッセージが書かれているのは木材。子ども達なりに考え、長く残るものをアトリエから探していたようです。「命」をどのように捉えるか。活動としての「お墓づくり」から「子ども達の想いを風化させないためのお墓づくり」へ。子ども達が納得のいく形で初めてのお別れを過ごしていました。